

1
Rd.
MAY 2011

RACING PRESS *apan*

**2011 AUTOBACS SUPER GT
ROUND 1 OKAYAMA GT250Km RACE**



2011 SUPER GT ROUND 1 OKAYAMA



Text
島村元子

Editor
吉川絹恵

Photo
鉄谷康博
加藤智充
中村佳史
近江 勤

**2011 AUTOBACS SUPER GT
ROUND 1 OKAYAMA 250Km RACE
5/21-22**

GT-R開幕戦から2連勝!

星野監督、涙の勝利。

【結果】					
優勝	12	松田次生	JP・デ・オリベイラ	カルソニックIMPUL GT-R	68周
2位	100	伊沢拓也	山本尚貴	RAYBRIG HSV-010	68周
3位	17	金石年弘	塚越広大	KEIHIN HSV-010	68周



GT500

シリーズ第2戦富士が先に行われ、当初開幕戦になる予定だった岡山での一戦がようやく開催。待望のレースながら、岡山の土曜の朝はあいにくの雨模様。しかしその量は少なく、午後からのノックアウト方式の予選を前に日差しも照り付け、ドライコンディションでのアタックが可能となった。

最初の予選1回目(Q1)は各車2名の選手がタイムアタックを行い、予選通過基準タイムをクリアすることが最低条件。さらにここから「ノックアウト」という名前のおとり、下位の車両が「足切り」の対象になる。さらにこの後、Q2、Q3とアタックは続き、最後のQ3では、GT500が7台、GT300は10台が最後のアタックに挑むことになった。

最後のアタック。好調をキープし、トップタイムをマークしたのは、No.17 KEIHIN HSV-010(金石年弘/塚越広大組)。2位No.12 カルソニックIMPUL GT-R(松田次生/J・P・デ・オリベイラ組)を0.443秒の大差で引き離れた。迎えた決勝。悪天候のため、朝のフリー走行がキャンセルされたものの、決勝は安定した天気でのスタートとなった。予選同様の速さを見せた17号車と12号車。だが、この攻防戦は接触という結果を招いてしまう。ペナルティを受けたのは17号車。強引なライン取りがアダになってしまった。勝てるレースを自ら落とした17号車はもちろんのこと、単独トップに立って優勝した12号車にとっても後味の悪いレースになっただろう。



予選3番手ながら岡山のテストでは好タイムを出している若手コンビで見事に表彰台。

2nd



ポールを獲得し好スタートを切った17号車塚越は痛恨の接触という結果でペナルティーで後退。

3rd

アストン・マーティンS-GT初勝利!

終盤、吉本大樹が猛追。

GT300



2nd



3rd



GT300ではNo.11 JIMGAINER DIXCEL DUNLOP458 (田中哲也/平中克幸組)がポールポジションを獲得。今季から投入した新車で初の優勝に期待がかかった。

決勝は富士同様、11号車とNo.66 triple a Vantage GT2 (吉本大樹/星野一樹組)とのバトルが続いた。前回は表彰台の一角を争う戦いだったが、今回は優勝の二文字を巡って壮絶な駆け引きが見られた。結果、リベンジに燃えた66号車の吉本大樹が猛追、ラスト5周で再度パス。トップに立った66号車はそのまま逃げ切りアストン・マーティンがスーパーGT初のチェッカーを受けた。11号車富士に続き連続の2位となった。

[結果]

優勝	66	吉本大樹	星野一樹	triple a Vantage GT2	63周
2位	11	田中哲也	平中克幸	JIMGAINER DIXCEL DUNLOP458	63周
3位	87	余郷 敦	織戸 学	リアルらんぼるぎーにRG-3	63周

THE FACE CLOSE-UP

Tsuchi
WAKISAKA
脇阪 寿一

Text by M.Shimamura

Photo: Tomomitsu Kato

悩み抜いた末、下した判断。 新たな決意を胸に、 チーム一丸でGTを盛り上げる!

SUPER GTにおける勝利の要素のひとつにドライバーのコンビネーションが存在する。そこにチームという大きな屋台骨が加わり、総合力としての強さを発揮しなければ、このレースでチャンパンファイトの美酒に酔うことは不可能だ。

今シーズン、レクサス勢は6チームすべてにおいてドライバー構成が新しくなった。中でも大きな話題は、脇阪寿一の移籍だった。5年間TEAM TOM'Sに在籍し、06、09年にはシリーズタイトルを獲得。その彼が古巣チームを離れるに至っては、さまざまな思いが去就したに違いない。人気の高いドライバーとして日本のモータースポーツ界における存在感はピカイチ。メディアへの露出も高く、またこのたびの東日本大震災に関しては、発生直後から即アクションを起し、多くの関係者とともに義援金活動をはじめ、多くのサポートを今もなお継続するなど、「行動の人」でもある。

その彼が新たなチームとして選択したのが、TEAM KRAFT。自身の移籍に留まらず、さまざまな点で変革を目指した。監督にはかつてコンビを組んで02年にはチャンピオンを獲得した飯田章氏を招へい。ドイツ・TMGに在籍する旧知のエンジニアも呼び寄せた。まさに、脇阪だからこそできるチームを作り上げてしまったのだ。パートナーは、

ベテランドライバーのアンドレ・クート選手。百戦錬磨のふたりがチームを引っ張り、鼓舞し、高い総合力を発揮できるよう、今まさに格闘中である。

富士、岡山と2戦続いたレースでは、残念ながらまだ納得のできる結果を残すまでには至っていない。小さなマシントラブルも含め、正直なところまだうまく歯車がかみ合わさっていないのかもしれない。とはいえ、14年目のシーズンを迎えるオトコにとって、このチャレンジこそがヤル気の出るステージなのではないだろうか。

勝利へのどん欲な意識、自分に限界を作らず、なおも上を見て果敢に攻めること。それこそがレーシングドライバーとしてのあるべき姿であることを、誰よりも知っているのが、彼自身だといえる。あと一歩、さらにもう一歩…。そのアプローチによって、レーシングドライバー・脇阪寿一としての輝きが新たに加わりそうだ。

【ドライバープロフィール】

1972年7月29日、奈良県生まれ。96年、全日本F3でシリーズチャンピオンを獲得。最高峰のフォーミュラ・ニッポンにデビュー後は98年にF1のジョーダン無限ホンダでテストドライバーを務めるなど、幅広い活躍を見せる。SUPER GTにおいては、02、06、09年にシリーズタイトルを獲得している。

